

〔書評〕

## 平野芳信著 陳系美訳 『從蝸牛食堂到挪威的森林』

——繁体中国語訳『食べる日本近現代文学史』を読む——

顔 淑 蘭

『從蝸牛食堂到挪威的森林』は、台湾で出版された、平野芳信氏著『食べる日本近現代文学史』の繁体中国語訳である。

平野芳信氏の『食べる日本近現代文学史』は、二〇一三年二月に光文社から出版された。そのわずか一年あまりの後（二〇一四年七月）に、台湾で繁体中国語訳が出されたわけだ。驚くほどの速さである。

『食べる日本近現代文学史』は、小川糸、川上弘美、向田邦子、江国香織、村上春樹、よしもとばなな、森茉莉、渡辺淳一、群ようこ、南木佳士などの現代作家から、谷崎潤一郎、志賀直哉、芥川龍之介、織田作之助、宮澤賢治、永井荷風といった近代の作家まで、幅広い作家と作品群がとりあげられている。それらを《食》という観点から鳥瞰し、文学、性、女、家族、文化、病氣、現代の七つのキーワードと結びつけながら、日本近現代文学史を見直した、著者の従来からの関心と趣向が存分に味わえる力作の一つである。

原著において、著者は独特の識見と批評性を込めた文学論と文化論を展開している。時代の変化に伴う物語の「テンプレート化」。

今日、物質的な過剰状態の象徴としての食べ物が、文学作品で欠損とか欠落を補う何かではなく、ただのモノとして消費されていること。料理を作ること、料理を描くことの性差及び時代の変化に伴う男女の役割分担の変換などなど。そして、「《料理小説》とは何か？」という大きな命題をめぐって、著者は「作る」という「新しい物語」と食べ物との関係の可能性を提示する。その観点に沿って、小川糸の『食堂かたつむり』は新しい《料理小説》たりうること、また、村上春樹という作家を知るうえで、料理を作れるということが重要な特徴だということ、著者は指摘する。文学史エッセイの一冊でありながら、研究書の鋭さも十分備えているわけだ。

本書は、幅広い日本の文学作品とともに、日本人作家にまつわる逸話も多く盛り込まれている。日本文学にあまり詳しくない台湾の読者にとって、日本の近現代小説に導いてくれる面白さを十分に備えた一冊だと言える。また、各国の、そして日本各地の料理はもちろん、一九八〇年代後半の日本のバブル経済から、「草食系男子」「スイーツ男子」などといった最近の文化現象まで網羅的に扱わ

れているため、日本文学だけでなく、日本文化に興味を感じる読者にとっても、一気に読了できる一冊である。これも、原著が日本で出版されてからわずか一年あまりの速さで台湾で翻訳出版された理由の一つだろう。

翻訳者の陳系美氏は、江国香織や東野圭吾など数多くの日本人作家の作品を訳している方である。訳文は、特に難しいと思われる小説の引用部分の翻訳など、ベテラン翻訳者の力を十分感じさせるものとなっている。直訳では意味が伝わらない部分の翻訳も工夫がなされている。硬いというイメージを免れえない一般の翻訳本とは一線を劃すと同時に、原文の意味を巧妙に伝えている。また、数々のおいしそうに訳された料理も、『食』のイメージを思いっきり前面に出したおしゃれな装幀とともに、読者の興味と「食欲」をそそるだろう。

台湾と中国大陸では、今や世界的に人気を集めている作家村上春樹はもちろん、よしもとばなな、渡辺淳一などの作家も多く翻訳され、広く読まれている。また、本書で扱われている『食堂かたつむり』も二〇一一年と二〇一二年に台湾と中国大陸でそれぞれ翻訳出版され、『センセイの靴』も二〇〇二年以降に訳されているようである。本書のタイトル『從蝸牛食堂到挪威的森林』（食堂かたつむりからノルウェイの森まで）も、こういった台湾市場における日本文学作品の出版状況を考慮に入れた上での選択だったろう。村上春樹のファンはもちろん、一般の読者でも気軽に手に取って読みたくなるような、どこか暖かさを感じさせるタイトルだ。

「料理」という表現とともに、日本料理が台湾と中国大陸でますます普及している今日。回転寿司のお店も各地で見かけるように

なってきた。が、それらはあくまでケンタッキーやマクドナルドといったファーストフードと同様に消費されていて、日本料理の「ソウル（魂）」がいつこうに伝えられていないように思う。それはもちろん、中国の土地柄に合わせて日本料理が変形されたためだけではない。シンブルさと新鮮さなどで勝負するような和食がいったん量産されることになると、何か根本的なものが欠落してしまうように思われるからだ。

日本現代の文学作品がこれまで台湾と中国大陸で多く翻訳出版されたことは先に述べた。とは言え、『食』という人類の生活とかかわる切実な問題から、日本文学そして日本文化を論じた本は、台湾だけでなく、中国大陸でもまた前例を見ないだろう。この一冊をきっかけに、日本文学ひいては日本文化に対する台湾の読者の興味と理解が高められ、海外で平野芳信氏の著作がますます注目されることになると信ずる。

もともと翻訳というものは、幾分か原著の情報なり面白みなりを失ってしまうものである。特に本書の場合、原著の方が豊富な情報量を持つだけでなく、文体もユーモアに富んだ一冊なので、日本文学に関する知識を十分に備えた翻訳者でも、完璧な訳は難しいであろう。本書にも多少の誤訳があることは、やむを得ないだろう。ただ、校正が行き届いていないのか、脱字や誤字などが見られることがいささか残念に思う。が、それらはもちろん原著の価値を傷つけるものではない。ぜひ台湾で再版されること、また簡体中国語版の出版を願いたい。

（遠足文化事業股份有限公司、二〇一四年七月刊行）

（早稲田大学大学院 イェン・シュラン）